

आयूस: あーゆす

〈発行〉京都市教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足80

『ふらんす物語』再読

副館長・助教授 伊藤和男

「ああ！パリー！自分は如何なる感に打たれたであろうか！有名なコンコルドの広場から、並木の大通ジャンゼルゼー、凱旋門、ブーロンユの森…」と永井荷風(1879-1959)は明治40年(1907年)7月、彼の憧れの地に到着した感激を『ふらんす物語』の中で語っている。「…フランスの自然は、母親の情というよりも、むしろ恋する人の心に等しいであろう。」とフランスの自然の美しさを賞で、「恋も歓楽も、現実の無惨なるに興さめた吾らには、何という楽園であろう。」と人の世の青春の恋を称え、「終の全きもの、目出度いものに、何一ツ真の生たる夢が宿り得よう。自分は全からぬ恋にやつれて死にたい。」と青春の夢と恋に心酔する姿を表現している。

荷風の愛してやまないモーパッサン(1850-1893)の石像のある魅力的で優雅なモンソー公園。「私は先生のように、発狂して自殺を企てるまで苦悶した芸術的の生涯を送りたいと思っています。…先生は人生が単調で、実につまらなくて、つまらなくて堪えられなかったらしいですね。愛だの、恋だのというけれど、つまりは虚偽の幻影で、人間は互に不可解の孤立に過ぎない、その寂寞に堪えられなかったらしいですね…」と呼びかけ、虚無的絶望感に共感したりもしている。パリと永遠に別れる日が近づくと、「…自分は何故一生涯巴里にいられないのであろう、何故フランス人に生れなかったのだらう。」と嘆きながらも、「旅人の空想と現実とは常に錯誤するというけれど、現実に見たフランスは、見ざる以前のフランスより

も更に美しく、更に優しかった。」と荷風の青春の恋人フランスを絶賛する。そして「…自分はよし故国の文壇に名を知られずとも、芸術家としての幸福、光栄は最早やこれに過ぎたものはあるまい！」とまで断言するのである。

二十代の学生の頃に読んだ『ふらんす物語』は私にとっての青春の書と言えよう。はじめてパリを訪れた時に、私自身、身体全体で感じ取り味わうことが出来たと思っているパリ、フランス、そのすばらしい文化に対する感動をこの書は見事に代弁してくれている。七月の雨上がりのオルリー空港から、ソルボンヌの夏期講座に参加するため、車で雨に光る魅力的な石畳の道を行った時、私にとって全くはじめての西洋との対面が始まったのである。パリの町、人、言葉、すべてがよくわからぬままにも私には快いものであった。「…Agréable—こころよき。かかる語の真の意義は、フランスでなければ、決して味い得べきものでないと、つくづく感じた。」とある。

青春の時期の感動は年とともに消え去り行く傾向にあるのだが、私にはその後パリを訪れても、その感動は増大しこそすれ、決して消え去ったり萎縮するなどということはない。なつかしい『ふらんす物語』を今再読し、新たな感激を覚えている。これは決して誇張された青春の、ある一時期の浅薄な情熱の表現ではない。そこには何か不変的な、人間の持つ純粋な憧れがすぐれた文章で美しく表現されているように思われる。(引用は岩波文庫『ふらんす物語』永井荷風著より)



中国旅日記 或る幼女との小さな出会い



教授 津田直樹 (造形表現)

中国南京市の或る大学へ、私は1人の女子学生を訪ねていた。学生課の女性と女子寮へ向う途中、その学生の中学生の頃を思い出した。日本の童謡が好きでよく歌った。ある時赤とんぼの歌詞の意味を教えろと言い、三番でやっぱりそうかと涙をこぼした。そして、何故このような悲しい歌を日本人は好むのかと私を手こずらせた。グラウンド沿いは梅や桃の花が満開で、中に白い花をひっそりとつける桜の木もあった。女子寮に着いたら、女性は今来た道を自転車で猛スピードで帰って行った。重くて黒い自転車はガガガーと鳴り続いた。私は受付の男性と石炭ストーヴを挟んで向い合った。そして、今訪ねる学生について彼に話した。

初めて出会ったのは遠い昔、彼女は幼女だった。いつものようにスケッチをしていたら、その子がやって来て、目を輝かせて色鉛筆やえのぐと遊んだ。その子の若い父親は、洗濯物を干しに出て、乾いた頃に取り込んでいた。夕方になって大雨が降り、私はその子と父親と3人で遠いバス停まで歩くことになった。1度太鼓橋のてっぺんで別れたのだが、彼等は又追いついて来た。遙か遠くで私の間違いを見ていたのだった。バス停まで40分程歩いた。幼女は傘の中で、父親の肩越しに、ずっと喋っていた。父も喋って、時折幼女は嬉しそうにケケと笑った。止まらなかった。バス停に着いた時、彼も私もずぶ濡れで、幼女は濡れていなかった。とても温かい道中だった。私が若い父親に、帰りは力車に乗るようにと10元渡そうとしたら、「歩いて帰る」と言い切った。しまった。彼等の気持ちは壊したように思えた。バスは大混雑で、狭くなった窓からやっと見えた。幼女は、父親の背中で赤い色鉛筆を握って帰って行った。もう暗くなっていた。2度と会えないいつもの旅だ。私の旅はそれから毎年続いて、久し振りにこの町を訪れた。幼女と出会った町である。大雨の別れで若い父親に失礼した。彼等はどうしているのだろうか。幼女はいくつになっただろう。今もあそこに住んでいるだろうか。私の旅は、名所や観光地を

避ける旅である。名も無いあそこなんて分るはずがない。ひしめく民家を縫う迷路を、スケッチし乍ら歩いていたら運河に出た。石灰や石炭を山積みにして、船がひっきりなしに走っている。おやっ、石造りの太鼓橋が現われて、寺や塔も見えて来た。昔スケッチした場所だ。近づいて来た柳の木の下にあの石がまだ在った。思わず坐り込んだら9年前に戻った。目の前の木戸から、今にもあの幼女が出て来そうに思えた。煙草を吸って木戸をたたいた。誰も居らず、隣家の老婆は前の流れを凝視している。己の人生と重ねているのだろう。私の問いに「知らん」と言った。やりとりすると中国では必ず人が集まって来る。1人の男が、近くで新聞を読んでいる老人の処へ私を連れて行き、大へんな事になった。「この男は9年前に出会った幼女を捜して、はるばる日本からやって来たあ」。人は人々となり、「アヤー」と言っている。1人の青年が走り出して、老人は言った。「あの時幼女は5才で、今年14才。8年前に親と遠くへ引越して、何処に居るか分らない」と。私は早くその賑やかな場所から逃げ出したかった。皆に頭を下げたら又やかましくなった。「幼女の祖父が近くに住む。今呼びに行ってる」と。老人は、「その子はお前と別れてから見知らぬ者が通る度、『あなたは日本人ですか』と声を掛けていた。3ヶ月程続いていた」と、教えて呉れた。

ストーヴを挟んで向い合う男性は、くるっと背を向け、机の上のメモ用紙に自分の名を書き込んで又振り返った。南京大学歴史系博士とあり、彼はダイヤルを廻して私に話の続きを促した。「青年が祖父を連れて来て、その日の夕方、私は人混みの中を自転車に乗っていた。前には父親が走り、もう1台には中学入学直前の娘が、母親の背中にしがみついて乗っていた。そして、心配そうに私を見ては、先程祖父母の家へ持ってきた、赤い色鉛筆を振っていた。」と話した時、バタバタ、ドドドーッ、女子学生がストーヴの部屋へ飛び込んで来た。3月28日快晴

* 私のすすめる3冊 *

専任講師 安藤ひとみ

1 『食と人生：81の物語り』

石毛直道・井上忠司・本間千枝子 [編]；財団法人味の素食の文化センター

小さい頃、遠足といえは母が作ってくれたお弁当を思い出します。とても重い弁当でした。そこには母の思いが込められていたことが、子供の弁当を作るようになってわかりました。このように個人的な思い出は食べることと重なっている事が多いように思います。この本を読み終えて、食にまつわる思い出には、さまざまな人生のドラマが刻まれていることを感じました。味の素食の文化センターでは食と人生をテーマとしたエッセイを全国から募集。700編を超える応募の中から選ばれた81編の作品がこの本に収められています。

2 『ベターホームのお菓子の基本』

ベターホーム協会 [編]；ベターホーム出版局

私は子供の頃からお菓子が大好きでした。お菓子の手作りを始めたのは子供が産まれてからです。子供の喜ぶ様子を見て、次から次へといろんなお菓子作りに挑戦。お菓子作りから楽しい思い出をいっぱい得ることができました。

この本は、いろんなお菓子作りの本の中で一番に推薦したい一冊です。作ってみておいしく、しかも作り方簡単。みなさんも一度お菓子作りに挑戦してみてください。

3 『大人のクイズ：論理力が身につく』

逢沢明著；PHP研究所

柔らかくて知的で感性豊かな頭脳。人間の頭というのは自由で、軽快で、とらわれることのない状態を最高とといいます。この本にはクイズが85題収められています。クイズを解くごとに硬くなった頭を柔らかくし、とらわれない発想力が身につくことを期待しながら、私も難問にチャレンジ。解けた時の快感、解けない時のくやしき（解けない問題が非常に多かったですが）、次は解けるかもと、どんどんのめり込んでいってしまいます。

仕事

わたしの立っている場所が
いま とつぜん
めずらかな異国の
どこかの果てであるかのように見えて来た
そこからわたしは
世界を眺める

書斎の中を

行ったり来たりする
ここでは書物が光だ 青春の日の夢に
わたしの眺めたすべての本のように
訪ねてくる人は わたしの求め夢みた——人
いつ来ようと——男でも女でも——

日盛りが あたりを
ひとけなくする そこでわたしは
微笑しわたしを知らない人たちに話しかける
わたしは かなたに無限のものを待つゆえに

ヒメーネス（荒井 正道訳）

『世界の名詩集 26』（平凡社）

※ スペインの詩人フワン・ラモン・ヒメーネス（一八八一—一九五八）の詩集『石と空』より。ヒメーネスの散文詩集『プラテローと私』は現代スペイン文学の古典の一つとしてよく知られています。一九五六年にノーベル文学賞を受賞。



『ハッピーバースデー(命かがやく瞬間)』を読んで



幼児教育専攻2回生 太田裕子

この本に出会ったのは、中学生の頃です。ちょうど、読書感想文の課題図書が店頭に並んでいたのですが、その中で、題名と、表紙の悲しそうな顔の少女の絵に心惹かれ、どのような内容の本なのかと思い、買って読んでみることにしました。

「おまえ、生まれてこなきゃよかったな。」7歳の誕生日の日、あすかは兄・直人に言われます。仕事が忙しい母親は、今年もあすかの誕生日を忘れているようです。それでも淡い期待を持って母親の帰りを待ちますが、帰ってきた母親と兄との会話から、「あすかなんか生まなきゃよかった。」という一言を聞き、声を出すことができなくなってしまいます。田舎の祖父のところに、静養していくあすか。自然とともに暮らす中で、生きる力と声を取り戻します。その後、自分の気持ちを言葉で伝えることを恐れず、いじめに立ち向かったり、障害のある友だちとの交流、祖父の死、友だちの死を乗り越え、あすかは自分の生きる道を切り開くことができるようになります。

なぜ、母親に愛されないのだろうか。自分が悪いのだと思い、自らの思いを閉じ込めるために、のどをつまみ、声をださないようにしたあすかの行動は、想像するだけで涙がでそうになります。愛されていないと分かっている、それでも母親への期待は捨てることができないために、我慢をし、そのような行動につながったのだと思います。そして、自分自身は母親を愛しているから、期待しつづけられるのだと思います。

私にとって、話をするという事は、生きていく中で、一番大切だと言っても良いくらいのことです。それを、誰かに奪われたりしたら、ストレスでいっぱいになり、死んでしまいたくなくとも思いません。幼い子どもだと、私を感じる以上に、大人から言葉で心を押し殺されるということは重く感じました。

この本の内容は、主に、母親による子どもへの精神的虐待がテーマになっています。この本を初

めて読んだ頃は、まだ“虐待”という事件が、それほど大問題としてとりあげられていたわけではなく、今と違い、授業で学んだわけでもなかったため、主人公のあすかの気持ちになって読んでいました。

しかし、母親にも、振り返りたくない悲しい過去があったのです。病気の姉に両親はかかりつきりで、どれだけ頑張っても親を振り向かせることはできない。“良い子”でいることで親を安心させ、それを演じるうちに心まで無くしていたのです。どんなこと背景にも、隠された真実があるのだということが分かりました。

子どもは、親の前では、いつでも“良い子”でいたいものです。しかし、親の期待に添えないのが普通だと思います。一人ひとりの個性があって、子どもでもその子の考えがあります。今の世の中は、特に、親の考え方で人生を歩んでいる子が多いのではないかと思います。あすかのように、自分の気持ちを押し殺して、声を出さなくしている子どももいるかと思うと、胸が苦しくなります。

この本を読むと、“生きる”ということについて、今一度考えさせられます。人に傷つけられたり、人を傷つけたりして人間は生きていますが、「言葉にする」その一言の重みを感じて話さなければならないと思います。そして、一人ひとりの命、世界でたったひとつしかないその命を、大切にしなければならないことを、改めて感じさせられました。みなさんも、ぜひこの本を読んでみてください。

青木和雄作：『ハッピーバースデー：命かがやく瞬間(とき)』（金の星社）